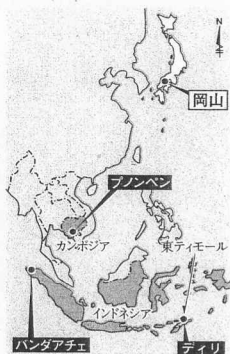


# 手と手と手

岡山発 国際貢献



国際医療ボランティアAMOA(本部・岡山市)の復興支援の下、懸命に生きる難所の津波被災地たち。昨年11月、インドネシア・バンダアチエ(斎藤章一朗撮影)



貧困層が粗末な家屋を並べる地域。雨期には水たまりが絶えない。昨年9月、カンボジア・ノンペン(横田賢一撮影)



## 広がる格差 世界に目を

昨年の国連報告書によると、六十五億人に届くかという世界人口のうち十億人もが貧困にあえいでいる。途上国にかぎれば、五人に一人だ。その途上国人口は、全体の八割を超え、貧困の拡大、増殖も懸念される。

貧困ラインは、国連の指標に従うと一日1.05以下の生活、あなたが目録販売機で清涼飲料水を買う、そのお金が日々の生活費に届くか届かないかの人々が、同じ地球に暮らし、その大半は満足に食事も取れない。

富める者と貧する者と。経済に代表されるグローバル化の進展とともに、その格差は拡大の一途を辿り、起因する矛盾がまた比例して広がっている。先進国を脅かすテロも本を捉れば、貧困にゆきつ

は。ほんの少しでいい。想像力を働かせながら、世界に目を向けよう。矛盾にさいなまれてあえいでいるのもまた、私たちに同じ人間なのだ。認識を新たにするだけで、あるいは見えてくるものが違ってもいい。さきに一步踏み込んで、手を差し伸べることはできないかと思えてみる。

一人の力は弱けれど、まともなれば溢るのわりにもろい。難しく考えなくてもできる。かたを「途上国」が「途上国」の原則だ。そんな感覚で、国際社会とかかりを持つこと。それが台頭するとき、国益の懸念ある政府機関よりも輪を持ち、国の援助活動をリードしていく役割さえ担えるかもしれない。

そう、われら地球市民。支援する者とされる者との関係ではなく、同じ地球に暮らす者同士、互いに仲良く生きよう。ついで手を差し伸べる。伸ばした手ばかりつないで歩む。互いに歩む。

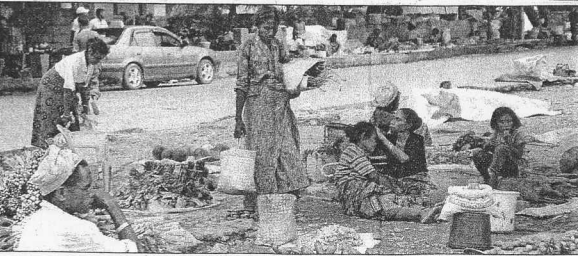
岡山からそんな国際貢献を考えました。(国際貢献取材班)



津波被害1年経ても道路が寸断されたまま。復興の道のりは険しい。昨年11月、インドネシア・バンダアチエ(斎藤章一朗撮影)



背後のごみ山で金めのものを拾って生計の足しにする子どもたち。昨年9月、カンボジア・ノンペン(横田賢一撮影)



独立を果たして4年目。貧しいながらも、人々は自立の道を歩みはじめている。昨年11月、東ティモール・首都ディリ(横田賢一撮影)